

柏崎市における音楽によるまちづくりの可能性

～ストリートピアノによる社会実験を通して～



新潟県柏崎市 山本 康太

1. 研究の背景と目的

柏崎市は、新潟県のほぼ中央に位置し日本海に面した 42 km に及ぶ長い海岸線と、米山をはじめとする山々を有し、また、国指定・重要無形民俗文化財「綾子舞」が伝わる鶴川、棚田やかやぶき集落で知られる高柳、古くから石油の採掘が知られている西山など恵まれた自然や景観・伝統文化・歴史に育まれたまちである。

筆者は、柏崎市職員として働きながら、休日は音楽活動に勤しんでおり、市内で開催される様々な音楽イベントへの出演や手伝いを行っている。その中で見えてくるのは、イベント開催時にはにぎわいを見せるものの、普段のまちなみは閑散としており、日常的なにぎわいづくりに課題があるということである。

しかし、筆者は、音楽活動を通して、様々な人たちとのつながりが生まれ、地域社会における居場所を感じることができた経験から、音楽がもたらす効果を実感してきた。また、京都橘大学大学院文化政策学研究科博士の西野桂子氏（2017）によると、音楽の特性として「人びとの距離感を縮める効用がある」こと、「地域に対する愛着や帰属意識を高める」こと、「他人との積極的な関わりを好まない層（又は不得意な層）が、『音楽をする』ことを通して、コミュニティに関わる事ができる」ことをあげている。

このことから、音楽が人とひととのつながりを強め、それが延いてはまちのにぎわい創出につながるのではないかとこの思いのもと、音楽によるまちづくりの可能性を探り、提案を行いたい。

2. 柏崎市における音楽文化の歴史と現況

(1) 60 年前に建設された野外ステージ

当市には昔、野外ステージがあったという。調べてみると平成 3 年に取り壊されており、当時筆者は生まれているが、その記憶は全くなかった。

筆者に野外ステージがあったことを教えてくれたのは、ロックギタリストの Char 氏である。筆者は、Char 氏が出演していた FUJI ROCK FESTIVAL' 19 のライブを聴き終え、帰宅するため越後湯沢駅に到着した。そこで偶然にも Char 氏と出会い、Char 氏と会話する中で「16～17 歳の頃、柏崎市の野外ステージで演奏したことがある。」と教えてくれた。会話できたことに興奮しつつ、当市に野外ステージが存在していたこと、また、そこで演奏したことを覚えていてくれたことに大変驚いた。

この出来事がきっかけで、野外ステージの存在を知ることになったが、その幕を閉じるまでにどのような歴史があったのか、当時のことをよく知る柏崎芸術協会の藤巻理事長へ

のヒアリングや地元新聞社の記事から、次のとおりまとめられる。

- ・ 昭和 35 年 7 月に、当時全国最大級の規模の野外ステージが海岸公園に完成した
- ・ ステージの大きさは、高さ 6m×幅 19m×奥行 8.7m。収容人数は 3,400 人
- ・ 完成から数年は利用機会が乏しく、器物損壊の被害に遭うこともあった
- ・ 柏崎芸術協会主催で、毎年夏に「柏崎サマーフェスティバル」と称し有名なミュージシャンを招聘していた。一例だが、もんたよしのり、アリス、グレープ、ダウンタウン・ブギウギバンド、沢田研二、海援隊、オフコース、松崎しげる等が出演した
- ・ 大相撲の巡業やプロレス、アマチュアミュージシャンのライブ等を開催し、活気に溢れていた
- ・ 晩年は騒音問題で大きなイベントを開催することが難しい状況であった
- ・ 平成 3 年 3 月、県立総合プール（アクアパーク）の建設に伴い、野外ステージを含む海岸公園の取り壊しが開始されその幕を閉じた



写真 1 野外ステージの全景
出典：柏崎市立図書館



写真 2 イベント開催時の様子
出典：柏崎市立図書館

(2) 柏崎音市場の誕生

当市は、平成 19 年 7 月に発災した新潟県中越沖地震により甚大な被害を受けた。特に、中心市街地である本町通り商店街は、店舗の倒壊や道路の隆起等の被害が大きく、復旧後もなかなか活気が戻らない状況であった。

そうした中、震災から 5 ヶ月後に「柏崎音市場」という音楽イベントが誕生した。柏崎音市場の内容や開催経緯について、主催するかしわざき音楽商店街の世話人代表石川氏は以下のように話している。

音市場は、見附市在住の〇氏が、柏崎のまちを元気づけるためジャズストリートのようなイベントを行わないかと提案に来たことから始まっている。(なお、石川氏は、本町通りで薬局を経営する傍ら、ジャズライブを聴く会を発足して定期的にライブイベントを開催していたため、ライブ会場に適した店舗に詳しく、アマチュアミュージシャンとも親交があった。)

ジャズストリートという提案であったが、当市の人口規模でジャズに特化するのは難しいと思い、ノンジャンルで音楽見本市のようなスタイルにすることとした。

市内の若手アマチュアミュージシャンを中心に声をかけたところ 20～30 人が集まり、開

催に向けた準備を進めることができた。また、会場設営や当日のスタッフとして、市内にある新潟工科大学の学生からも協力を得ることができた。

ライブ会場は、商店街の店舗を中心に16箇所を選定した(図1)。その中には、震災で倒壊した建物跡地にオープンしたギャラリーが含まれており、震災からの復興という物語を盛り込んだ。

協賛依頼やチラシ配布、会場設営等の企画・運営は、石川氏を中心に出演者が手弁当で行い、音市場の成功に向けて一致団結している。このスタイルは現在も変わらず続いており、毎年出演団体は約50組、来場者は800~900人にのぼる。

音市場を開催したことで、まちに人が歩く姿が見られるようになり、にぎやかになったと実感している。その一方で、マンション近くの広場を会場にした際、マンション住民から苦情を受けたことがあり、屋外でイベントをする難しさを感じた。



写真3 音市場の様子



図1 音市場会場マップ
出典：柏崎音市場 VOL.13 パンフレット

(3) 柏崎市の若年層における音楽活動の状況

当市の若年層は、どのような思いで、またどのような環境で音楽活動を行っているのか、その実態を探るべく、新潟工科大学軽音楽部の部員にインタビューを行った。

【新潟工科大学軽音楽部 H氏、S氏】

バンド練習は、大学内で行うことが多い。大学以外で行うときは、長岡市の練習スタジオを借りている。ライブ活動は、定例で行っている学内ライブや学園祭のほか、市内企業のイベントに呼んでもらうことがある。

柏崎音市場には今回初めて出演した。地域で協力して運営を行っているところに温かさを感じた。また、様々な世代や音楽ジャンルの人たちと交流できることも嬉しかった。こういったところからつながりが生まれていくのだと思った。柏崎にはこのようないいイベントはあるが、ライブハウスがなく、発表する場所が限られている。できることならライブハウスがほしいという思いがある。

(4) 柏崎における音楽のまちづくりの到達点と課題

これまで見てきたように、当市においては、野外ステージの取壊し後、震災復興を契機

にまちなかを舞台にした音楽のまちづくりが展開されてきた。柏崎音市場は、主催者の努力と商店街の理解や協力により、市民にとって毎年開催されるイベントとして定着している。

しかし、野外ステージが存在していた頃から続く騒音問題により、屋外でのイベント実施は難しく、会場の中に入らなければ音楽を味わうことができない状況である。また、学生は発表する場所の少なさを感じており、ハード整備が難しい中、その課題をどのように解決していくか問われている。

3. 近年始まった音楽によるまちづくりの先進事例

昨今、規模の大小を問わず、様々な音楽イベントが全国各地で開催されている。ここでは、地域住民が主体となり、音楽を活用したまちづくりを行っている事例について、担当者へのヒアリング等により調査を行った。

(1) ひたちなかサウンドシップ（茨城県ひたちなか市）

ひたちなか市では、毎年 ROCK IN JAPAN FESTIVAL という日本最大級のロックフェスティバルが開催されている。「音楽のまち」というイメージを根付かせたいという思いから、音楽愛好者や関係機関が、日常に音楽が溢れるまちを目指そうとひたちなかサウンドシップの活動を開始した。

定期的に様々な場所でライブイベントを展開している。特に、「おんがくマルシェ」というイベントでは、屋外にライブステージや飲食ブースを設けている。また、「オトイクマルシェ」という楽器の演奏体験コーナーもあり、来場者が音楽を聴くだけでなく、楽器に触れることで、より音楽に親しむことができる場を作り出している。

音楽イベントを屋外で開催することについて、担当者のひたちなか市観光振興課K氏は、「屋内でイベントを行ってしまうとどのようなことをしているか分かりづらくなってしまふ。音楽に溢れたまちを目指しているため、屋外でイベントを行うことで、通りがかりの人たちにも音楽の楽しさを伝えることができる。」と考えている。



写真4 おんがくマルシェ

(2) 伊丹オトラク（兵庫県伊丹市）

市内のライブハウスのイベント情報を1枚のチラシにまとめようという取組から伊丹オトラクの活動が始まった。その中でも、「オトラク広場」というイベントでは、「音楽が生活にもっと寄り添う風景をつくりたい」、「音楽のもっと色々な在り方を探したい」、「音楽を通して人とひとをつなぎたい」という思いの中、自然発生的に音楽が生まれるような雰囲気づくりを目指し、公園の芝生の上や縁石等をステージとして活用し、野外ライブを展開している。

また、近年は伊丹まちなかバル（バル街）の開催に併せて「オトラクな一日」という他

自治体にはないイベントを行っている。これは、ミュージシャンがバル街の参加店に「流し」のように演奏して渡り歩くもので、出演団体数は約 40 組にもものぼる。担当者の公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団 K 氏によると、オトラクな一日を目的にバル街に来られる人もおり、相乗効果を実感しているという。

4. ストリートピアノによる社会実験とその結果

(1) 社会実験のねらい

当市では、これまで見てきたように、以前は野外ステージの活用によりまちに活気が溢れていたが、騒音問題による規制強化で屋外における音楽イベントが困難となり、その影響は現在の柏崎音市場にまで及んでいる状況である。

それに対して、前章の先進事例のように、近年では日常に音楽が溢れるまちを実現するために、屋外を舞台にした音楽イベントが立ち上がり始めており、日常的に使われる場所を舞台に設定し、まちに音楽が溶け込むよう工夫をしていた。また、誰もが自由に音楽に触れることができるような環境を自然と作り出していることもポイントである。そこには、公共空間を活用することの重要性も示されている。

そこで、筆者は、公共空間を地域住民の手に取り戻すため、また、公共空間に音楽があることでどのような反響が得られるか検証するため、近年都庁をはじめ全国各地で広まっているストリートピアノ（誰でも自由に弾くことができるピアノ）を設置する社会実験を行うことにした。

(2) 企画段階で生まれたドラマ

ストリートピアノを行うに当たり、職場の仲間に声を掛けたところ、4 名の職員が企画・運営に協力してくれることとなり、社会実験の在り方や目指す方向性、企画概要の話し合いを重ねていった。

ストリートピアノを行う上で、「ピアノをどうやって調達するか、どこに設置するのか」という課題が必ず浮上してくる。今回の社会実験は、全てメンバーの手弁当で行うこととしたため、多額の費用は掛けられない。そこで、グランドピアノを所有する市民プラザ（市直営の公共施設）を会場に、かつそのピアノが使用されないタイミングで社会実験ができないかと考えた。市民プラザでは例年 11 月にマナビィステージ（生涯学習の成果発表会）が行われており、筆者が目をつけたグランドピアノが設置されている部屋は出演者控室となるため、ピアノを使うことはないのではないかと考えた。

市民プラザの担当者からは、ピアノの管理面を心配する声があったが、スタッフが常駐することを条件に許可を得ることができた。

しかし、その後、グランドピアノの寸法が大きく、現在設置されている部屋から搬出できないことが判明した。ピアノのメンテナンスを依頼している株式会社洋琴舎からも現場を見てもらったが、脚を取り外し梱包した上で搬出する必要があるとのことであった。

搬出には相当の費用が掛かるため、グランドピアノは諦め、電子ピアノに切り替えて準備を進めることとした。その矢先、株式会社洋琴舎から「せっかく良い取組を行おうとし

ているため、何か協力できることはないかと考えていた。ちょうど小学校のグランドピアノの入れ替えがあるため、引き上げてきたもので良ければ無償で提供したい。」との連絡があり、奇跡的にグランドピアノを調達することができたのである。

(3) 社会実験の結果

ストリートピアノによる社会実験は下表のとおり 2 日間に渡って実施した。延べ来場者は 356 人、延べ演奏者は 114 人という結果であった。

当日は、マナビィステージ開催日ということもあり、比較的人の出入りが多かったが、ピアノが演奏されると、通りがかりの人が足を止めて演奏に聞き入る場面が多く見られ、中にはだんだんと人が集まってくる様子も見受けられた。普段は閑散としているロビーが、ピアノ 1 台でこれほどまでにぎやかになるのは驚いた。

また、幼い子どもが主旋律を演奏していると、見ず知らずのご婦人がそれに併せて連弾するという場面もあり、音楽が人とひととを結びつけることを改めて実感した。



写真 5 演奏中の様子



写真 6 連弾の様子

- | |
|---|
| <p>【設置場所】 市民プラザ 1 階ホール</p> <p>【実施期間】 令和元年 11 月 16 日 (土) ~17 日 (日) 両日とも午前 10 時~午後 7 時まで</p> <p>【台 数】 グランドピアノ 1 台</p> <p>【ル ー ル】</p> <ul style="list-style-type: none">・誰でも自由に弾くことができます・譲り合いの精神により 1 曲演奏したら交代しましょう・演奏中は奏者の邪魔をしないようにしましょう・他人に迷惑をかける行為はしないようにしましょう・ピアノを大事に扱きましょう <p>【周知方法】</p> <ul style="list-style-type: none">・チラシの設置 (音楽教室、カフェ、市民プラザ等)・SNS による拡散 (シティセールス Facebook 等)・口コミによる拡散 (知人の音楽経験者への周知)・地元新聞社の記事掲載 |
|---|

ストリートピアノの概要

(4) アンケート調査結果

社会実験の実施期間中、来場者に対してアンケート調査 (回答者数 65 人) を行い、その効果を検証した。

まず、来場者の属性は、女性が 64.6%と過半数を超えていた (図 2)。また、10 代が 36.9%と最も多かったことが特徴的である (図 3)。さらに、性別と年代をクロス集計したところ、10 代女性が 18.5%で一番多く、次いで 10 代男性が 13.8%という結果が明らかになった。

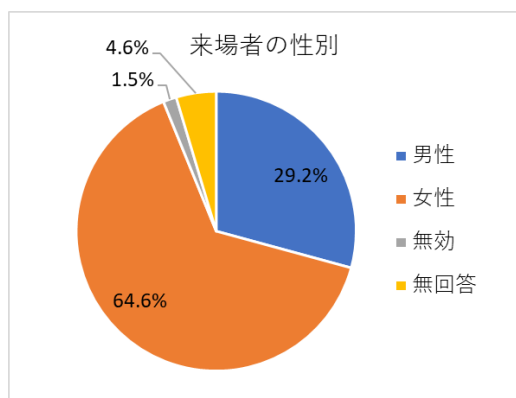


図 2 来場者の性別

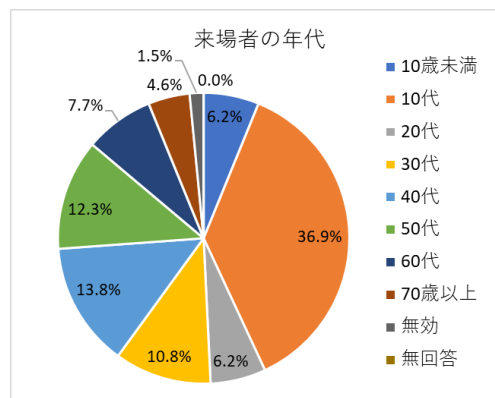


図 3 来場者の年代

来場者がストリートピアノのイベントを知ったきっかけは、「通りがかり」が 49.2%と約半数を占めた（図 4）。マナビィステージ開催日に併せて実施したことも要因の一つだと思うが、通りがかりに気軽に参加したというのは、その効果を表している。

演奏者に対して、演奏しようと思った理由を聞いたところ、「楽しそうだから」が 41.7%、次いで「音楽が好きだから」が 38.9%であった（図 5）。

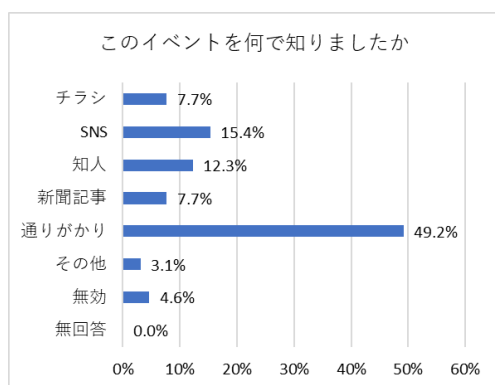


図 4 イベントを知ったきっかけ

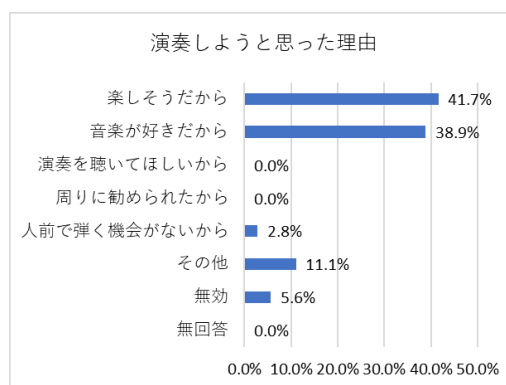


図 5 演奏しようと思った理由

来場者に対して、参加して楽しかったかどうか聞いたところ、「とても楽しかった」または「楽しかった」と答えた割合は 93.9%であった。

ストリートピアノを設置したことで施設の居心地はどのように感じられたか聞いたところ、「とても居心地がよかった」または「居心地がよかった」と答えた割合は 92.4%であった。

ストリートピアノを続けてほしいか聞いたところ、「続けてほしい」または「どちらかと言えば続けてほしい」と答えた割合は 87.7%であった。また、「続けてほしい」または「どちらかと言えば続けてほしい」と回答した人に対して、その理由を聞いたところ、「楽しい気持ちになるから」が 36.2%、次いで「まちがにぎやかになるから」が 22.4%であった（図 6）。

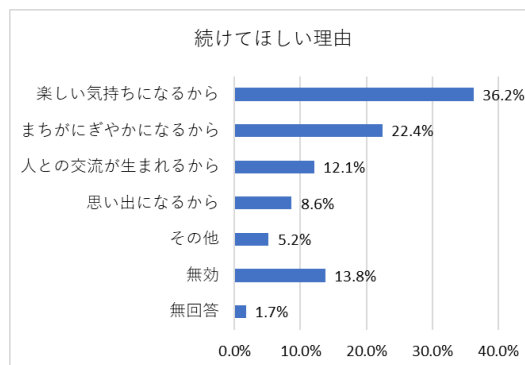


図 6 イベントを続けてほしい理由

5. 公共空間を活用した音楽によるまちづくりの提案

(1) 公共空間における自由主導のルール必要性

昨今の公共施設や公園等の公共空間においては、騒音トラブルや不慮の事故等が取り沙汰される中、そのような問題が発生しないよう使い方を制限しているところが多い。そのため、地域住民は使いづらいと感じるようになり、だんだんと使われなくなってしまうのである。

しかし、ストリートピアノによる社会実験で証明されたように、公共空間で出来ることが増えると、その場所が楽しく居心地の良いものになることがわかる。株式会社グランドレベル代表取締役社長の田中元子氏（2017）は、次のように述べている。

「良いグランドレベルをつくるポイントのひとつは、ルールづくりにある。管理体制をラクにするため、面倒が起きないようにするため、とりあえずいろいろと禁止しておく日本によく見る「禁止」主導のルールではなく、このぐらいまでならやってもいいよ、という「自由」主導のルールが必ずといっていいほど、そこにはある。」

これは、グランドレベル（まちの 1 階部分）におけるルールであるが、公共空間においても同様のことが言えるのではないかと。

図司ゼミナール現地調査で訪れた高知県梶原町立図書館「雲の上の図書館」では、それを実践しているルールづくりが見られた。そのルールとは、「フタのある飲み物だけ持ち込み可能」「携帯電話での通話は 1 階で」「撮影可能」「おしゃべりはなるべく小さな声でヒソヒソ程度で（おしゃべりは 1 階で）」といったように禁止する表現ではなくやってもいいことを表記しているのである。

実際にこの図書館は、誰もがゆったりと過ごすことができる滞在型空間を作り出しており、音楽を活用したまちづくりを行うに当たり、公共空間が居心地の良いものであるためには、このような自由主導のルールが重要なのだということを示唆している。



写真 7 図書館のルール

(2) 音楽が溢れるまちづくりの提案

このような公共空間における自由主導のルールを意識しながら、次の 3 点を提案したい。

①ストリートピアノの継続実施

社会実験で行ったアンケート調査の結果から、ストリートピアノを設置したことで「楽しい」「居心地が良い」と多くの方が答えており、その効果から、ストリートピアノを継続的に実施することを、まず提案したい。

今回の社会実験では、ピアノ調達の課題から市民プラザにて実施することとしたが、市民プラザは市街地中心部に立地し人が集まりやすく、また、その周辺には多くの高校があり、若年層が集まるポテンシャルを秘めている。さらに、1 階がガラス張りであるため、外からストリートピアノが行われていることがわかる利点は大きい。

②若年層を巻き込んだ屋外ライブイベントの実施

先進事例で見てきたように、近年屋外を舞台にしたライブイベントが各地で多く見られている。これは、屋外で行うことにより不特定多数の人にも何をやっているのか伝えることができるのはもちろんのこと、これまで禁止主導のルール下にあった公共空間を自由主導のルールにシフトする動きと言ってもいい。

そこで、当市に昔存在した野外ステージの歴史を思い出すような、屋外ライブイベントの実施を提案する。一例だが、過去の地元紙を調べていくと、ロックバンドの演奏をバックに、踊ったり騒いだり、自由に来て遊べる「ロックピット」というイベントも行われていたようである。また、高校生や大学生等の若年層が出演でき、音楽を通して地域社会とつながりを持てるよう、間口を広げたい。

野外ステージの再建は現実的ではなく、以前建てられていた場所には県立総合プールが存在するため昔と同じ場所で開催することはできない。しかし、震災復興における駅前再整備により、駅前公園には広々とした芝生の広場ができた。この場所でのライブイベントはまだ見たことはないが、開放感のあるこの場所で、屋外ライブが実現できれば非常に気持ちが良いと思う。将来的にそれが日常に溶け込むようになれば、この広場にも活気が出てくるだろう。



写真8 駅前公園芝生の広場

③体験型イベントの導入

ひたちなかサウンドシップが行っている「オトイクマルシェ」では、来場者に楽器の演奏体験をしてもらうことで、音楽への親しみを深めてもらっていた。また、筆者がアース・セレブレーション（佐渡市で開催される鼓童のイベント）に参加した際に体験した和太鼓体験ワークショップでは、先生のレクチャーを受けながら参加者が気軽に和太鼓を叩くことができ、充実した時間を過ごすことができた。

これらのことから、来場者が聴くだけのイベントではなく、体験できるイベントの導入を提案する。例えば、柏崎音市場等の既存イベントにおいて、出演者が先生役となり、来場者が気軽に楽器に触れることができる場を設けるのはどうだろうか。来場者には、演奏する楽しさが共有され、より音楽への親しみが生まれていく。また、先生役となる出演者には、誰かの役に立つという存在価値が与えられることで、自分の居場所を感じることにつながるものと考えられる。



写真9 和太鼓ワークショップ

(3) 音楽によるまちづくりの効果

音楽が人やまちに与える影響は極めて大きいものがある。今回の社会実験で、「ピアノを1台置く」ということだけでも、多くの人たちがその思いに共感していただき、関わり合いを持つことができた。また、ピアノがあることでそこに人が集まり、にぎわいが生まれる

ことも実感した。

アンケート調査の自由記述では、「誰もが自由に弾け気軽に聴ける場所があるのは最高に良い」「地域がにぎわい、楽しくなるので、色々なところでやってもらえると嬉しい」「音楽に触れる機会が増えるのはとても良い」という意見があった。これは、地域住民が音楽のある場を求めているということであり、その場で体験した楽しさや人とのつながりが地域への愛着に結び付くのではないだろうか。

柏崎市第五次総合計画（前期基本計画）では、人口減少・少子高齢化への対策として、①子どもたちがまちへの誇りと愛着を持つ、②若い世代や女性から選ばれる、③高齢者がいきいきと暮らす、という3つの戦略的視点を持って施策を展開するとしており、「若い世代の地域への愛着」が一つのキーワードとなっている。

音楽が若い世代の心を捉えているのは社会実験で明らかになっており、地域への愛着向上のため、音楽によるまちづくりが有効であると言える。行政は、公共空間における自由主導のルールによる居心地の良い場づくりを進めていくべきなのだと思う。また、そのような場を提供することにぜひ協力的になってほしい。

今回のストリートピアノによる社会実験を通して、誰もがまちに良い変化を起こすことができるのだと感じた。筆者を含め、今後そのような主体が増えていくことで、柏崎のまちが面白くなっていくのだと思う。

【参考文献】

- ・ 柏崎市第五次総合計画（基本構想・前期基本計画） 2017年
- ・ 西野桂子「音楽を活用した地域コミュニティの構築に関する研究」京都橘大学大学院文化政策学研究科博士論文，2017年
- ・ 柏崎芸術協会ホームページ <http://park6.wakwak.com/~k-geikyo/index.htm>
- ・ 柏崎日報 昭和35年7月15日付け 夕刊
- ・ 柏崎日報 昭和58年5月13日付け 夕刊
- ・ 柏崎日報 平成3年3月20日付け 夕刊
- ・ ひたちなかサウンドシップホームページ <https://soundship.wordpress.com/>
- ・ ふだん使いの音楽プロジェクト伊丹オトラクホームページ <http://itami-otoraku.com/>
- ・ 田中元子『マイパブリックとグランドレベル—今日からはじめるまちづくり』晶文社，2017年